

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381215

研究課題名(和文)日本人EFL学習者の信条の特徴と英語熟達度に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on Japanese EFL Learners' Beliefs and English Proficiency

研究代表者

飯島 博之 (IIJIMA, Hiroyuki)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：80310994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：リカートスケールの質問紙への回答を因子分析した結果、英語学習全般、リーディング、スピーキング、リスニング、ライティングの全てのカテゴリーにおいて「動機づけ」に関わる因子が抽出された。特に英語学習全般に関する信条、ライティングに関する信条という2つのカテゴリーにおいては、動機づけ因子の標準因子得点に基づく分散分析の結果から、上位群>下位群の有意な関係が示され、英語熟達度上位の方が下位者よりも動機づけが強いことが確認された。このことから、EFL環境における英語学習においては学習者の動機づけを図り、維持強化することが重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study investigated Japanese university students' beliefs regarding learning English. Participants involved in this study were non-English-major university students studying at a public university. The students answered likert-scale questionnaires developed by the author, and the data obtained were computerized using factor analysis and ANOVA. Factor analyses performed on the data showed that "motivation" was a factor that emerged in all the categories of beliefs: beliefs regarding (a) studying English in general, (b) reading, (c) speaking, (d) listening, and (d) writing. Further analyses using ANOVA showed that advanced-level students were highly motivated especially in the two following categories, (a) studying English in general and (d) writing. These results show that learners' motivation is the key to successful language teaching in an EFL environment.

研究分野：英語教育学、リーディング、学習者要因

キーワード：信条 ビリーフ 英語熟達度 EFL 動機づけ

## 1. 研究開始当初の背景

言語学習信条(BALL)とは、言語はどのように学習すべきか、また、言語学習はどのようなものかという様な言語学習に関する考え方、信念を指す用語である。BALLに関する研究論文では、Horwitz(1987)がしばしば引用され、そこで beliefs と呼ばれている概念は言語学習観、信念、信条、確信、ピリーフ、ピリーフス等の形で言及されている。学習者が持つ BALL は、言語学習を管理する学習のメタ認知的な支えであり、ある学習信条を持つ英語学習者はその考え方に基づく学習方法をとることが予想され、学習戦略の使用や言語学習に対する態度にも影響を与える。故に、学習者の BALL を把握することは、学習者自身の自律学習にとどまらず教室における外国語教育にとっても極めて重要である。

Horwitz(1987)は語学教師から聞き出した BALL を基に、ESL 英語学習者用に 5 領域(言語学習の適性・言語学習の難易度・言語学習の性質・学習とコミュニケーションストラテジー・動機) 34 項目からなる質問紙(BALLI)を作り、調査を行い、学習者は様々な BALL を持っているが、教師と学習者の BALL は必ずしも一致しないこと、BALL が学習ストラテジーにも影響を与えていること、等を指摘した。Wenden(1987)も成人 ESL 学習者を対象としたインタビュー調査の分析から、学習者が各自の BALL に従った学習行動をとっていることを指摘している。また、読解の研究において、Barnett(1989)は「最も有効だと考えるストラテジーを使用していると思っている学生は、そのような方略を使っていると考えていない学生たちよりも、より多くのことを理解している」と述べ、ストラテジー使用と言語熟達度の間に関係があることを指摘している。竹内(2003)は日本人大学生を対象とした研究を行い、英語力上位群の特徴として自らの学習ストラテ

ジーに関するメタ認知力が強いことを指摘している。これらの結果から、BALL には学習者によって違いがあり、学習環境や文化等の影響を受けていることも考えられる。また、BALL は言語学習ストラテジーにも影響を与えており、言語熟達度や学習期間による違いがある可能性も考えられる。そこで、本研究においては、日本の EFL 環境での英語学習者の BALL に関わる諸研究を進めてゆく際に使用可能な日本人 EFL 学習者用質問紙の開発を行い、開発した質問紙を用いて日本人 EFL 学習者の BALL の分析を実施する。英語学習全般に関する BALL からスタートし、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングに関して順次研究を行う。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

- (1)日本人 EFL 学習者用に適した質問紙(BALLI)の開発を行う。
- (2)日本人 EFL 学習者の言語学習信条と英語熟達度との関係を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1)対象者:

- 英語学習全般に関する信条(平成 25 年度):  
非英語専攻の大学 1 年生 184 名
- リーディングに関する信条(平成 26 年度):  
非英語専攻の大学 1 年生 254 名
- リスニングとスピーキングに関する信条  
(平成 27 年度)  
非英語専攻の大学 1 年生 235 名
- ライティングに関する信条(平成 28 年度)  
非英語専攻の大学 1 年生 257 名

### (2)質問紙の作成

Horwitz(1988)が開発した外国語学習者用の 34 項目から成る言語学習信条に関する BALLI の内容を検討し、日本人英語学習者に対する質問項目として適切であると判断された項目に、筆者の英語教師としての経験に基づく項目、大学 1, 2 年生の自由記述に基づく項目を追加し、5 段階尺度形式の日本語の質問紙を各年度ごとに研究テーマに合わせて作成した。

### (3)調査の実施

通常の英語授業時間内に授業担当者が質問紙を配布し回収した。

### (4)上位群・下位群への分類

各年度とも調査対象者を TOEIC IP テストの得点に基づき、中央値を目安として、上位群・下位群の2群に分類した。

(5)分析方法：因子分析・分散分析(SPSS)

### (6)倫理的配慮

各年度毎に埼玉県立大学倫理審査委員会の審査と承認を得た。

## 4. 研究成果

### 1)英語学習全般に関する信条(平成25年度)

質問紙から得られたデータを因子分析したところ、英語学習に関して、第1因子(動機づけ)、第2因子(スピーキング能力特別視)、第3因子(構造理解)、第4因子(学習への積極性)の4因子が抽出された。標準因子得点の平均値に基づく分散分析を行った結果、第1因子(動機づけ)において上位群と下位群の間に上位群>下位群の有意な関係が示された。

### (2)リーディング信条(平成26年度)

前年度同様に因子分析を行った結果、第1因子(ストラテジー)、第2因子(自己効力感)、第3因子(動機づけ)、第4因子(英文分析)の4因子が抽出された。各因子の標準因子得点に基づく分散分析の結果、第1因子(自己効力感)において上位群>下位群の有意な関係が見られた。また、第2因子(英文分析)においては上位群<下位群の有意な関係が示された。

### (3)スピーキングとリスニングに関する信条(平成27年度)

スピーキングに関する信条

因子分析の結果、第1因子(英会話に対する積極性)、第2因子(英会話に対する緊張感)、第3因子(英会話に関する通説)、第4因子(英会話力特別視)が抽出され、各因子毎に分散分析により上位群と下位群の比較を行ったところ、第1因子(英会話に対する緊張

感)において上位群<下位群の有意な関係が示された。

リスニングに関する信条

因子分析の結果、第1因子(動機づけ)、第2因子(学習ストラテジー)、第3因子(母語話者からのインプット重視)、第4因子(リスニングに対する自信)の4因子が抽出され、標準因子得点に基づく分散分析の結果、第1因子(リスニングに対する自信)において上位群>下位群の有意な関係が見られた。

### (4)ライティングに関する信条(平成28年度)

因子分析の結果、第1因子(ライティング時の留意点)、第2因子(動機づけ)、第3因子(英訳意識)、第4因子(ライティング力影響要因)、第5因子(英語技能難易度)の4因子が抽出され、各因子毎に分散分析により、上位群と下位群の比較を行ったところ、第1因子(動機づけ)において上位群>下位群の有意な関係が見られた。

### (5)総括

英語学習全般、リーディング、スピーキング、リスニング、ライティングの全てのカテゴリにおいて「動機づけ」に関わる因子が抽出されている。特に英語学習全般に関する信条、ライティングに関する信条という2つのカテゴリにおいては、動機づけ因子の標準因子得点に基づく分散分析の結果、上位群>下位群の有意な関係が示され、英語熟達度上位の方が下位者よりも動機づけが強いことが確認された。このことから、EFL環境における英語学習においては学習者の動機づけを図り、維持強化することが重要であることがわかる。

### <引用文献>

① Horwitz, E.K. Surveying Student Beliefs About Language Learning. In Wenden A. and Rubin J.(Eds), *Learner Strategies in Language Learning*, London: Prentice-Hall, (1987): 119-129.

② Wenden, A.L. How to Be a Successful Language Learner. In Wenden A. and Rubin J.(Eds), *Learner Strategies in Language Learning*, London: Prentice-Hall, (1987): 103-117.

- ③ Barnett, M.A. Reading through context: How real and perceived strategy use affects L2 comprehension. *Modern Language Journal*. (1989); 72: 2 150-162.
- ④ 竹内 理. より良い外国語学習法を求めて: 外国語学習成功者の研究. 松柏社. (2003)
- ⑤ Horwitz, E.K. The beliefs about language learning of beginning university foreign language students. *The Modern Language Journal*, 72, 2, (1988): 83-294.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

飯島 博之、上越英語研究、上越英語教育学会誌、査読有、15巻、2016、3-16

〔学会発表〕(計 3件)

飯島 博之、日本人 EFL 学習者の英語学習全般に関する信条の研究、第 40 回全国英語教育学会徳島研究大会、2014 年 8 月 10 日、発表場所：徳島大学常三島キャンパス(徳島県・徳島市)

飯島 博之、日本人 EFL 学習者のリーディングに関する信条の研究、第 41 回全国英語教育学会熊本研究大会、2015 年 8 月 23 日、発表場所：熊本学園大学(熊本県・熊本市)

飯島 博之、日本人 EFL 学習者のスピーキングとリスニングに関する信条の研究、第 42 回全国英語教育学会埼玉研究大会、2016 年 8 月 20 日、発表場所：獨協大学(埼玉県・草加市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯島 博之(IIJIMA Hiroyuki)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：80310994

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )